

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第六号



文学館の住人たち

死という終点をいつも心のどこかで気にかけているせいか、わたしたちには、ものごとを悲しく見してしまう傾きがあるようです。

なにこにつけて、「やっぱりすーつとそうなんだ。人生ってそういうものなんだ」と考えて、悲しくなってしまう。なにか一つでも、ことがうまく運ばないと、「この世では、なにかもうまく行かないことになっている。それが人生なんだ」と悲しくなってしまう。なにか悪いことが起ると、「やっぱり自分のせいなんだ。いつも自分はそうなんだ」と悲しくなってしまう。よいことが起っても、「たまたまそうだったんだ。自分はないものでもないのに」と悲しくなる。

もちろん、「悪く行ったら他人のせい、うまく行ったら自分の手柄」と考える人もいないではありません。そういうばかばかしい自信家よりは、こういった悲しがり屋の方がずっとましではあります。悲しがり屋の方が、何も生まれません。それどころか、やがて息をするのさえ辛くなる。どうしたら、この悲しがる癖を治すことができるのか。それには、文学館の、静寂でありながら充実もしている空気を吸うのが一番です。そこには、「人生って、すーつとそうなんだ」といつか悲しみながらも、「でも、そういう人生を愛することができないだろうか」と、必死の思いで戦った人たちが住んでいるからです。生きることがいかに複雑で、しかもそれをいかに単純にできるかを、生涯を通して追求した人たちが、文学館の住人なのです。

ですから、鳥崎藤村が「人生は何度だってやり直すことができるんですよ」とやさしく信州訛りで説いてくれるでしょうし、原阿佐緒が「どんなに悲しくても、人は生きるしかありませんよ」と励ましてくれるはずですし、尾形亀之助が「眠らずにあても朝になつたのがうれい」と煙草をすすめてくれるかもしれない。文学館は、そういうふしぎの起る所。悲しくて淋しい日は、どうか文学館へおいでください。もちろん悲しくなくてもどうぞ。

仙台文学館

館長 井ノ口

ことばとその周辺

第六回

世帯回りでなく文字にかかわる活動に取り組んでいるグループを紹介するコーナーです。

読書と読み聞かせグループ「おはなし倶楽部」

息づかいの聞こえる間合いで「本の楽しみ」を伝える

「おはなしは上がるって、うって天のにおえ」小野しづさんが心配そうに窓の下を見下ろすと、赤や黄色、色とりどりの小さな傘が、五々集まって来た。今日は小野さん夫婦が営む小さな本屋さんの二階で開かれる、月に二度(第四土曜日の「おはなし会」)の日なのだ。

この日の参加者は子ども七人、大人が十八人。部屋の仕切りを払ってしつらえた会場は満員だ。

オープニングはいつものように「はじまりのうた」をみんなで合唱。小さいながらも常連の子たちが一所懸命に声を張り上げている。

今回のテーマは七夕。佐藤次子さんがこの日のために運んだ「空のうえにはなにがある?」の朗読を始めると、早くも子どもたちの眼は釘付けた。

「しつかりしたおはなし会にしていきなから、自分たちが本当に惚れ込んだ本をプログラムに乗せるんです」と代表の葛西ムが終ると、梅雨明けを待ち兼ねたような強い陽射しが雨雲の切れ目から降りてきた。作ったばかりの七夕飾りを笹竹に取り付ける子どもたちの歓声が路地に明るく響いた。



読み聞かせをする葛西さん(上)と会報誌「おはなし倶楽部」のおはなし会に通う子どもたちも好きな本の感想を寄せている。



左さん、でさん、小野しづさん、佐藤次子さんと小野さん夫婦。

浮子さん。時には上級生の子が紙芝居にチャレンジすることも。「本に親しむきっかけ」と取り入れた手遊び、歌、折り紙、手袋人形など様々な遊びを楽しんでいるうちに、時間はあっという間に過ぎていく。



冠文堂書店の小野さん夫妻。

外遊びが好きで初めは「お話なんて」とそっぽを向いていた藤井坊主が、回を重ねるにつれてだんだんと引き込まれて、ついには大のお話好きになったこともある。おやつタイムが終わると、梅雨明けを待ち兼ねたような強い陽射しが雨雲の切れ目から降りてきた。作ったばかりの七夕飾りを笹竹に取り付ける子どもたちの歓声が路地に明るく響いた。

問い合わせ先

仙台市宮城野区福田町一七二一九
電話(022)258-1350
「おはなし倶楽部」事務局・
冠文堂書店/小野さん

五月二十二日、井上ひさし館長が来館。伊坂幸太郎さんの日本推理作家協会賞受賞「死神の精度」・「オール読物」平成十五年十二月号掲載と、熊谷達也さんの山本周五郎賞受賞「運送の森」の話題になりました。日本推理作家協会賞の選考委員を務める館長曰く、伊坂さんの作品は一人を幸せにする素晴らしい作品。断トツでした。満場一致での受賞だったそうです。

七月八日、第百三十一回の直木賞候補が発表され、そのお一人も名を連ねました。さて、結果は如何に?と思っ待っている熊谷さんから「結果なさってみませんか?」とお誘いが、噂に聞きし「結果待ち」の空気を味わうとは、滅多にない機会と参加させて頂きました。

七月十五日の午後六時、回分町の、とあるお店で会はず。熊谷さんにも「やかにビールのグラスを傾けます。が、携帯電話が鳴るたびに、全員敏感に反応しては、苦笑いが漂います。ふと窓の外を見れば、カメラを構えて遠巻きにこちらを見ている報道各社の方々。初めての体験に緊張しつつ楽しんで、熊谷さん受賞の知らせが届き、会場は、気に湧きました。その後の祝



祝賀会にて、熊谷さん(左)と伊坂さん

賀会には伊坂さんも駆けつけ祝賀。貴重な瞬間を一緒に過ごした、感慨深い夜でした。

七月二十八日、当館で開かれた宮城県高校文芸部の生徒研修会で、作家の佐伯・まささんが講師として来館。自身の高校生活を振り返りつつ、創作・表現について講演しました。質疑をする人が獲物を欲しがるように、貪るように読む事が必要」と佐伯さん。緊張していた高校生も、次第にほぐれてきて「書けない時どうしてですか」「いい表現が出来た時、どんな気持ちですか」「この場の誰かについて、プロの描写を見せてください」と迫ったり、佐伯作品の分析批評をぶつけたり。佐伯さんは「人物を造型・描写する時は、三人の人物像から、一人の人物を造型する、あるいは、一人の人間を何

八月十九日、仙台駅東口で島崎藤村の記念碑の除幕式がありました。明治二十九年に來仙した藤村が滞在した名掛丁の宿「三浦屋」の跡地が、新しい広場に生まれ変わり、この記念碑が建てられたのです。この際には名掛丁東名会の方々の尽力があります。



「区画整理で、変わりゆく街に、自分たちの財産である藤村と仙台の縁を長く残したかった」と語る会のメンバー。若菜集の標をあしらった広場に佇む時、百年余り前の仙台と、藤村の文学的記憶に思いを馳せることができます。

向田邦子の世界展



「クロワッサン」特別展「向田邦子展」

「向田邦子」展と「愛友録」展。彼女が愛した様々なものを展示し、向田邦子の魅力あふれる世界をたどります。11月13日(土)・12月12日(日)

『三銃士』

アレクサンドル・デュマ著

はまってしまった、というのが最も正しいと思う。大学三年、それまで本など読まずにきた私が、急に乱読を始めた頃の話である。

デュマの『三銃士』も乱読の一冊にすぎないはずだった。子供向けなら読んだことがある。アニメや映画でもみたことがある。



る。が、きちんと原作を読んだわけではないからと、軽い気持ちで文庫本（確か岩波文庫だった）を開いたのが運の尽きだった。とにかく、面白い。さらに続編があると思えば、いてもたってもいられなくなり、『二十年後』と『ブラジユロンヌ子爵』とともに『ダルトニヤン物語』に所収。当時は講談社文庫で読めた。現在もブックキングで読めるも、一気の勢いで読了してしまった。

おりもおりで卒業論文を書くための専攻を決める時期だった。私は西洋史学の研究室に入り、それもフランス史を選んだ。後に私はフランス史に題を求めて、小説を書くことになるわけだが、当然ながら当初から日論見があったわけではない。が、ならば純粋に西洋史学を追求したかったかといえ、そんな風に胸を張る気にもなれない。今にして思えば、もっと『三銃士』の世界に浸りたいと、それだけのことだったかもしれない。



告白している。同じような手合いは意外と多いのかもしれない。さておき、私はフランス史の勉強に夢中になった。そのうち大学院に行きたいとまで考えるようになったが、そのためにはフランス語が読めなければ駄目だと、当時の指導教官に叱咤激励されてしまった。ならばと、念発して、私が取り組んだフランス語の特訓というのが、果たしてもデュマの『三銃士』だった。仙台の丸善で原書のペーパーバックをみつけると、これを辞書片手に最後まで訳し通せば、それなりの語学力が身についているだろうと、私はダルトニヤンさながらの無謀な冒険に出たのである。

アトス、ポルトス、アラミスではないが、もちろん私にも頼りになる朋友はいた。そこは世界的な名著であり、何種類も翻訳が出ていたのだ。いちいち突き合わせれば、まったく意味が取れないということもなかった。調子に乗るまま、自分なりに最後まで訳したが、そのときのノートは今も散逸してしまっている。あつても開きたくないくらい、間違えだらけの訳文が並んでいるはずだが、それでもフランス語は多少なりとも上達したらしい。じき歴史書くらいは読めるようになり、大学院にも進学することができた。

大学院では、必は真面目に勉強したが、しばらくすると、興味が先祖がえりしたとか、あるいは自分が惹かれたものを、はつきり自覚できたというのか、私は小説を書くようになった。これは面白いと興奮したのは、そもそもが歴史でなく、小説のほうだったのだ。してみると、ずいぶん遠回りしたようであるが、まがりなりにも作家



『三銃士』(上)(下)
アレクサンドル・デュマ著
生島遼一訳
岩波文庫

として働いている今にして、それも悪くなかったと、いや、それこそ正解だったのだと、しばしば痛感させられている。デュマの『三銃士』を訳すという作業は、フランス語の勉強になったというより、いっそう日本語の訓練になった気がするからである。ひとつ単語を辞書で引けば、何種類も意味が出てくるわけであり、それが適当かと考えながら訳すうちに、それまで知らなかった日本語が、ずいぶん頭に入ったのだ。

まさにデュマさままで、もし『三銃士』に出会うことがなかったら、私は作家にならなかったかもしれない。なんであれ没入すれば、没入しただけの報いがあるという教訓だが、それにしても、そこまで私を引きこんだ『三銃士』の魅力とは何だったか。デュマの筆力とは何だったか。小説家としての技巧の高さ、歴史家としての風格、社交家としての人間観察の鋭さ等々もさることながら、私が思うに、これだけ世界中で読まれるからには、もつと本質的なファクターがある。というのも、デュマの『三銃士』を読んでいると、陽気な喋り好きの顔が浮かんでくる気がするからである。

それが作品に、どうにもこうにも憎めない、一種の愛嬌を与えている。デュマといえ、一気呵成に物語を畳みかける作家の代名詞のようにいわれるが、その実の作品では結構な脱線もしているのである。なに読者を飽きさせず、あれだけ長大な物語を讀ませてしまうというの

は多分、これだけは語らないでほしい。これだけだと笑うような、陽気な好漢の魅力にやられてしまうからである。これだけ

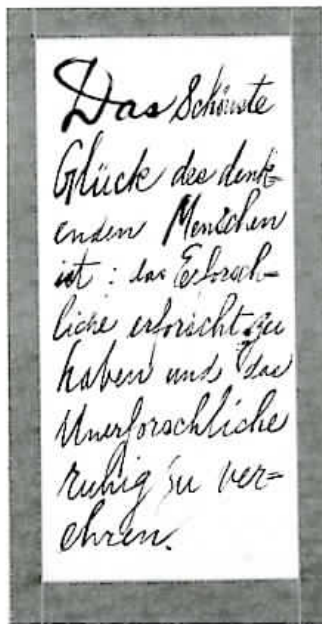
は、ちよつとやそつとの勉強で身につくものではないなあと苦笑しながら、それは作家としての私の悩みにもなっている。



佐藤 賢一 (作家) 1968 (昭和43) 年山形県生まれ。東北大学大学院在学中の1993年に、『ジャガーになった男』で、小説すばる新人賞受賞。99年『王妃の離婚』で直木賞受賞。西洋の歴史に題材をとった『双頭の鷲』『二人のガスコーン』『カルチュ・ラタン』など、著書多数。現在は『小説宝石』に『アメリカ第二次南北戦争』を連載中。

土井晩翠筆 ゲーテ箴言の書 (軸装)

本多 真紀 (仙台文学館学芸員)



土井晩翠といえは、「荒城の月」や「星落秋風五丈原」などの作品で知られる詩人であるが、詩作の傍ら、さまざまな外国文学の翻訳を手がけた学者でもあった。関連な筆づかいでドイツ語が記されたこの書は、そんな晩翠の学

者としての一面を示す恰好の資料である。ここに記されているのは、「思索する人間のもつともすばらしい幸福は、探究し得るものを探究し尽し、探究し得ないものを心静かに崇めることである」という意味のゲー

テの箴言。晩翠の専門は英文学で、母校・旧制二高においても長く英語・英文学の教鞭をとったが、明治三十四年から三年間、ヨーロッパに滞在して各国の文学を学んだ経験もあり、フランス語、ドイツ語、イタリア語のほか、ギリシャ語、ラテン語、さらにはサンسكريット語に至るまで習得していた。その天才的な語学力は、カーライル、バイロン、ユゴー、ホメロスなどの作品の翻訳に存分に発揮されている。まさにこのゲー

テの箴言は、晩翠の旺盛な探究心、学者としての学問への限りない憧憬を象徴的に言いあらわしたものと見えよう。この書を晩翠から贈られ、終生手元に置いていたのは、晩翠の教え子の故・中島慶治氏である。大正時代の終わり、東北帝大に出講していた晩翠に教えを受けた中島氏は、のちに英文学者となり、宮城学院女子大学や岐阜大学の教壇に立った。その略歴を考えると、晩翠は、自身と同じ学問の道を歩んだ教え子への期待や激励を込めて、この書を中島氏に贈ったのではないかと思われる。晩翠は、

情熱あふれる名物教師として多くの学生から慕われたが、この資料のエピソードからも、そんな「晩翠先生」の人となりが見えてくる。

原文(晩翠書ママ)

"Das Schönste Glück des denkenden Menschen ist: das Erforschliche erforscht zu haben und das Unerforschliche ruhig zu verehren."

*箴言の訳の引用は、『ゲーテ全集』十三巻(潮出版社、一九八〇年)によった。

「賢治と東北」

まだ発見されていない 「ほんとうの」賢治

高橋源一郎さんが、この展覧会の図録で「宮沢賢治は本当にわからない」「宮沢賢治は未だに読まれていない。未来の読者を待っているのである」と見事に凝縮された表現で言い切っています。なんかすこくよく分かります。

賢治は、まだ本当の意味では発見されていないんじゃないか——賢治は「ほんとうの」という言葉が大好きでした——じゃ



講演に引き続いて、歌人で宮沢賢治研究者の佐藤通雅氏(左)との対談も行われた。

あ誰が「ほんとうの読者」になるのか。二十一世紀を迎えた今、宮沢賢治の作品をどのように読むことができるのか。それはとても難しい問題です。

ところで、僕自身が九〇年代の東北各地を聞き書きのために歩き回って明らかに感じたのは、東北の二十世紀は飢えからの解放の時代であったんだ、ということなんです。

凶作や飢饉は、日本の西の方では明治の半ばには終わっています。それにもかかわらず、東北だけがそれらを昭和になっても引きずっていました。

賢治は、そうした歴史を刻まざるを得なかった「東北」と「所懸命闘つていたのだ」と思います。どうすれば農民は食えるようになるのか。そうした問いかけは、賢治の時代にはとてもリアルなものだったんだと思います。

一九九四年の九月半ば、僕は岩手県の遠野に行つたのですが、この年の東北は冷害凶作でした。祭りで賑わう神社から、歩外に出ると、触つてみてもほとんど実が入っていない青立ち

の水田で、笛や太鼓や人々の姿に、なんだか泣きながら祭りをしているような不思議な印象がありました。しかし、冷害凶作にもかかわらず、誰一人飢えて死んではいない。女の子の身売りも、一家心中もない。それがとても不思議でした。

高度経済成長期を経て、東北でも飢えや貧しさからの解放が確実に実現したんだと思います。実際には「もうここでは生きていけない」と村を捨てて外に出て行く人たちの姿がポツリポツリと現れ始めていて、村の衰弱、衰滅は別のところで起こっていたのですが。

一方には、稲作以前のブナの森に抱かれた東北の縄文的な暮らしの風景を掘り起こして、それを手がかりに東北を語ろうとする賢治がいました。

他方には、例えば「グスコブドリの伝記」のように、米にこだわって土壌改良や肥料設計という形で生産を増やし、飢えや飢饉から民衆を救い出そうとする賢治もいました。

いわば、「稲作以前」と「稲作

以後」に引き裂かれた賢治がいたのだと僕は思っています。けれども、こうした「引き裂かれた賢治」のイメージそのものが、もしかしたらもうわれわれの時代にはリアルさの大半を失っているのかもしれないというふうにも感じています。

そのことを踏まえて、われわれが今、賢治について語るといことはどういうことなのか、未だの「ほんとうの読者」はどのような形で現れるのか、を少しだけ考えてみたいと思います。

賢治は 聖人君子か？

今回、こういう形で僕が佐藤通雅さんの対談の相手に指名されたのは、どうやら、宮沢賢治を祭り上げるだけではなくて批判的にそれを乗り越えていく何かが必要なんじゃないかというモチーフがあったようで、控室でも「賢治を批判してください」とそのおかしさを感じました(笑)。



注文の多い料理店」考
イーハトヴからの風信
赤坂憲雄、吉田文恵編・著
五柳書院刊 1995年

ところで、賢治の受容のされ方に対して身悶えするようなひたむきで本源的な批判を投げかけている「宮沢賢治殺人事件」という作品があります。その著者吉田司さんのお母さん、吉田コトさんは実は僕の講義の聴講生でもあるのですけれど、賢治の最初の著作集を賢治の弟の清六さんと一緒に編集したこともある方です。賢治が春画を集めたりしていたことを、賢治の父親政次郎から直接、耳にしていたりもしたそうです。

「あいつ(賢治)は、肺病病みで女性と結婚したりつきあうことができないから春画を集めている。それを自分は許している」と。賢治は集めた春画を素材にして自分の弟子たちに性教育をしたというエピソードが伝えられています。それが、僕にはとても気になるのです。

もしも賢治が性というものを忌み嫌っていたとしたら、弟子たちに性教育なんてありえない。性に対して距離をとっていただけでも、拒んでいたわけではないんじゃないか。ただ、自らに対して性に関わることを禁欲したということはあると思います。

賢治のいくつかの詩篇を讀んでみますと森の中を彷徨い歩く詩があつて、明らかにそれは性欲に身悶えしながら行き場もなく森を彷徨している賢治の姿のように見えるのです。

こんなことをとりとめもなく話したのは、僕はあの「雨ニモマケズ」という詩によって描かれた禁欲の聖人君子としての宮沢賢治というものに本当に納得できないし、そういう賢治像が描かれること自体が不幸なことだと思つてからなんです。

賢治の浮世絵に対する鑑識眼は素人離れしたなかなかのものだったらしいのですが、どのような春画を賢治が集めていたのかは今となっては確認ができません。今、その中の一枚でも見ることができれば、われわれは賢治というものを、もう少しふくらみのあるまなざしで見ることができたらどうだろうと思います。あまりにも清らかで聖人君子、というイメージが先行すると、やはり見方が歪んでしまうんじゃないかと思つています。

グロテスクで はちやめちやな笑い

「蜘蛛となめくじと狸」という作品がありますよね。不思議な作品ですよね。とても童話として成立していない。

例えば象徴的なのは、なめくじが怪我の治療と称して蜥蜴の身体を舐めていく場面です。ペロペロペロペロ舐めていくんです。すると舐められていく蜥蜴は、ああ気持ちいい気持ちいいとか言いながらも、でもなんかおかしいからもうやめてくれと頼むのですが、なめくじはやめな

い。ついに心臓まで舐められて、蜥蜴は絶命するのです。

あの姿でいったいなんだろう。直接的にはカニバリズムっていうんでしょうか、人間が人間を食うみたいなのがあると思います。

もう一つは、その食べるというを通してセックスのメタファーにもなっているような気もするんです。愛する人を舐め尽くし食べ尽くしたいというような欲望って、確かにありますよね。

賢治はそういう、なめくじに紙め殺され食べられる蜥蜴の恍惚、死と引き換えに食べられる恍惚というものを、知らん顔して童話に仕立てて残したのかもしれない。屈折に満ちた、隠された欲望がうごめいている賢治

は、とても奇妙な風変わりな存在、男でした。

その作品世界が宿しているとてもグロテスクな笑いや道化ぶり、それらはきちんと語られてきたんでしょうか？ そこに賢治が密かに埋め込んでおいた思想とかそういうものは読み解かれてきたんでしょうか？

そこにまで視野をのばすような読みには、賢治はまだ出会っていないのかもしれない。

いう意味では、高橋源一郎さんの言われるように、ほんとうの読者はまだ未来に属しているの



かもしれない。そんな気がいたします。

■赤坂憲雄(民俗学者) 1953(昭和28)年、東京生まれ。東京大学文学部卒業。1992年東北芸術工科大学に赴任し、現在同大学教授。東北をフィールドに、歴史学と民俗学という複眼的視野から独自の学風を形成。「東北学」の構築を目指している。主な著書に「異人論序説」(砂子屋書房)「王と天皇」(筑摩書房)「東北学へ」(作品社)など。

Theatre Group OCT/PASS 特別公演 PLAY KENJI 仙台文学館 「センターの広場」

石川裕人 作・構成・演出

梅雨の合間の強烈な陽射しにいつそ輝きを増す石舞台。固唾をのんで見つめているかと思えば、突然の笑いに沸き立つ観客。

賢治の様々な童話の世界を縦横無尽に横断する1日限りの祝祭劇——「宮沢賢治展inセンター」の関連イベントとして開催されたTheatre Group OCT/PASSの特別公演には、3ステージで計300名を超える観客が訪れ、賢治文学のひと味違う楽しみを満喫しました。



「鹿踊りのはじまり」「蜘蛛となめくじと狸」「ゼロ弾きのゴージュ」「春と修羅」などを再構成した作品を上演



OCT/PASSは在仙の老舗劇団。「PLAY KENJI」シリーズと銘打ち、賢治にちなんだ数々のオリジナル作品を手掛けてきました



計300名を超える観客の中には「文学館は初めて」という方も



TheatreGroup OCT/PASSと仙台文学館の共催で平成16年6月12日に開催されました。

赤坂 憲雄

野口雨情の書簡

『おてんとさん』との関わり

田中朋子（仙台文学館学芸員）

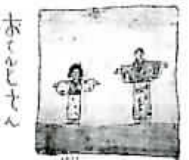
大正七年の「赤い鳥」創刊をきっかけに、子どもむけの新しい雑誌が次々と出版され、日本の児童文学が花開いたことはよく知られている。仙台の地においても、スズキヘキ（本名：鈴木栄吉）と天江富弥（本名：天江富蔵）という二人の青年により、大正十年三月に子どもむけの雑誌『おてんとさん』が創刊された。大人と子どもが一緒に楽しめる内容を目指したこの雑誌は、野口雨情、山村容鳥、竹久夢二ら中央の文学者の児童や隨筆の他、子どもから寄せられた童謡や挿絵も掲載された賑やかなものであった。

当館には、野口雨情が天江富弥宛てた書簡三十三通が、おてんとさんの会から寄贈されている。これらのほとんどは、『おてんとさん』が創刊から終刊をむかえるまでに交わされたもので、雨情の文学観や人柄を示す貴重な資料である。これらの資料からは雨情が『おてんとさん』のどのような点を支持していたのか、そして雨情の童謡観とはどのようなものだったのか、といった事が見えてくる。



野口雨情をかこむおてんとさん社の仲間たち。左から2人目へキ、3人目富弥、1人おいて雨情。

「おてんとさん」創刊号表紙



おてんとさん

創刊号に掲載された雨情の「酸漿畑」



おてんとさんの会から寄贈されている。これらのほとんどは、『おてんとさん』が創刊から終刊をむかえるまでに交わされたもので、雨情の文学観や人柄を示す貴重な資料である。これらの資料からは雨情が『おてんとさん』のどのような点を支持していたのか、そして雨情の童謡観とはどのようなものだったのか、といった事が見えてくる。

おてんとさんの会から寄贈されている。これらのほとんどは、『おてんとさん』が創刊から終刊をむかえるまでに交わされたもので、雨情の文学観や人柄を示す貴重な資料である。これらの資料からは雨情が『おてんとさん』のどのような点を支持していたのか、そして雨情の童謡観とはどのようなものだったのか、といった事が見えてくる。

○大正十年二月五日

仙台市北目通り十九 おてんとさん社 天江登美草様 鈴木碧様/東京府下田端三三三番地 「金の船」編輯所 野口生 大正十年二月五日夕

お手紙ありがとうございました。おてんとさんの前途を幾重にも御祝福申し上げます。おてんとさんは日本建國以来初めて生れた童謡専門の雑誌であることを限りなくうれしく思はれます。先達日鈴木さんからお手紙をいただきました。何にか愉快なことを認めて御返事あげようと思つて遂ひ〱今日になってしまひました。大変に心が替りまして居ります。天江さんから鈴木さんへすまなかつたことをおつしやつて下さい。

わたしの童謡は十三日までにお手許へ届きますようお送り致します。よろしがつたら毎号でも差上げます。

それから、こんど、わたしの民謡集「別後」が神田の尚文堂から出版しました。尚文堂からも皆様へお知らせ致した筈ですが、ぜひ御知友へ御吹聴願ひませう。

○大正十年三月二十一日

仙台市北目通り十九番地 おてんとさん社 天江登美草様/十八日夕 東京田端金の船 野口生

香浅き折柄、鈴木さん始め皆様の御健康を御祈り致します。二月五日夕 薄暗き机の上にて 野口生

自由にならしたい」「ガラスメガネ」とするへキの考えは、自分が拠つて立つ詩作の原点と、非常に近いものだったのである。

大正十年十一月四日付の書簡には、次のように認めてある。「東北の天地に童謡が歓迎されるようになったのもいつも申し上げます通り仙台におてんとさんが生れたからです。これはお世辞でもなんでもないので、実際のことで。尤も東京の雑誌や新聞の力もあるには相違ありませんが、おてんとさんがした實際運動の力はそれ以上の効果があつた」と考へられます。おてんとさんの主張や小生の正論が、どうやら、他の一切のものを征服すべき実際の日が来るだらうと（思ふと）愉快です。……

こうして見ると、冒頭でのやや大袈裟にも思える激励も同じくするこの小さな雑誌に、励まされていたのではないだろうか。

おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ
おてんとさんへ

大正十年2月5日 天江登美草、鈴木碧宛 書簡

大正十年3月21日 天江登美草宛 はがき

雨情の激励

富弥とへキは雑誌を創刊するにあたり、「金の船」後に「金の星」と改題の編集を手がけ、投

稿される童謡の選もしていた雨情に、内容について相談していた。そうして出来上がった雑誌『おてんとさん』に対して、雨情は「日本建國以来初めて生れた童謡専門の雑誌」という、やや大袈裟とも思われる賛辞を贈ったのである。このような熱烈的な表現は他の書簡にも見られる。「私共は飽くまで郷土文芸を尊重し愛護致します」（大正十年二月十九日）、「おてんとさんが外国がぶれをせずに、どこまでも郷土文芸を標榜して進んで下さい。ほんとうの日本の童謡はこれだと、無自覚者を覚醒してやつて下さい」（年月日不明）。

これらの記述からは雨情が、創作童謡の掲載に力を入れ、子どもの童謡や挿絵が紙面を飾つたこの雑誌に、いかに期待していたかを知ることができる。実際、雨情は、創刊号に掲載された「酸漿畑」の原稿をはじめ、「囁かれ太郎作」、「おてんとさんの唄」の二作品を寄せている。また、毎号送られてくる「おてんとさん」への丁寧な感想も送っている。

しかし、雨情はこの小さな雑誌に、なぜここまで心ひかれたのであろうか。その著作「童謡十講」で、雨情は「徒らに雅語や熟語を用ひ、殊更に異国情調を唄つて、その時代の子供に分らないやうな童謡を作る人がありますが、

これは童謡として何の価値も生命もないのは勿論のこと」と述べ、西洋の象徴詩からの影響を受けた異国情緒にあふれた童謡を発表し、芸術的な詩の一つとして童謡を捉えていた西条八十や、日本のわらべうたを童謡の基本として出発しながら、マザー・グースの影響を多分に受け、洗練された童謡を書いていた北原白秋に異を唱えている。

郷土の言葉で

「郷土の言葉で書かれた童謡」が本質であるという「郷土

童謡論」を展開していた雨情は、「東北地方の人は東北地方の言葉で書き、関西地方のものは関西地方の言葉で書いた童謡を持たねばならない」「童謡は子供の生活を唄つたもので、その歌詞は唄ふことが出来、踊ることが出来るものでなくてはならない」と主張していた。

「仙台の子供には仙台の童謡がいます。……乃ち郷土童謡と言ふことは大変大切な事だと思います」（「童謡雑感」と書いている富弥や、「童謡への曲は、子供自身が、その子供供にとつて

自由にならしたい」「ガラスメガネ」とするへキの考えは、自分が拠つて立つ詩作の原点と、非常に近いものだったのである。

大正十年十一月四日付の書簡には、次のように認めてある。「東北の天地に童謡が歓迎されるようになったのもいつも申し上げます通り仙台におてんとさんが生れたからです。これはお世辞でもなんでもないので、実際のことで。尤も東京の雑誌や新聞の力もあるには相違ありませんが、おてんとさんがした實際運動の力はそれ以上の効果があつた」と考へられます。おてんとさんの主張や小生の正論が、どうやら、他の一切のものを征服すべき実際の日が来るだらうと（思ふと）愉快です。……

東北大学「魯迅の階段教室」



当時は最後の奥に幻灯機を据え付けた小部屋があった。「藤野先生」にも描かれた幻灯上映の場面はここ

魯迅（1881~1936）が医学を志して仙台に学んだことはよく知られている。短編「藤野先生」はその頃の思い出に基づいた佳作だ。

その魯迅が当時学んだ教室が、今なお東北大学の一角に残されている。

魯迅は1904年9月から06年3月まで仙台医学専門学校（東北大学医学部の前身）で学んだ。清国官費留学生として初めて来仙した2名の内の1人だった「愚弱な国民の」「精神を改造する」ために「文学運動を提唱しよう」と考えた」と「呐喊」の自序には記されている。そのきっかけとなった日露戦争の幻灯を見せられたのも、この教室であろう。



芳名帳を示してくださった永田さん。黒板の寄せ書きは、一杯になる度に写真に残されている

東北大学 国際交流部国際交流課 千980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 電話 022 (217) 5019 ※「魯迅の階段教室」の見学には予約が必要です。

「中国の方にとってはとりわけ感慨深い場所なのでしょう。98年に来仙した汪兆銘国家主席（当時）も訪れましたよ」と東北大学史料館研究員の永田英明さん。

幾たびも増改築や移築を重ねられ、幸いに戦火をも逃れたこの教室は、文学に対する魯迅の思いを語り継いでいるようだ。（T）



棟続きに建物が存在した名残を示す軒の跡。最後は理学部の教室として使用され昭和40年代に一旦はその使命を終えた



正式名称は仙台医学専門学校六号教室。現存する旧制二高および東北帝国大学の建築物の中でも2番目に古いとされている